

【日本山岳会『山岳』2016】

自著を語る

East of the Himalaya- Alps of Tibet and Beyond: Mountain Peak Maps

ヒマラヤの東山岳地図帳

中村 保

ライフワークへの道程

「GIS（地理情報システム）、衛星写真や他の地図作成アプリケーションの進歩により世界は刻々狭くなりつつあると言われる。しかし、登山の黄金時代が終わってから探検を始めたが、長くアルピニズムに貢献してきた中村は異を唱える。知られざる山の存在など過去の話であると思いこんでいる連中もいるが、中村は言う一チベットは信じがたいほど広大で地形は複雑、無数の未踏峰がある。生涯の踏査研究の吸引力がある。峰々は魅力的で壮大であり、それらの多くは数世代に亘って謎として残るだろう。」と『ヒマラヤの東山岳地図帳』の英文の帯に書いた。山岳書として英語・日本語・中国語の三カ国語版は世界で初めての試みだろう。

20年前に山と溪谷社から出版した『ヒマラヤの東』が人生二毛作の再出発点である。元企業戦士、今老年探検家にとって『地図帳』編纂のための10年は一つの仕事を成就する時間の区切りだった。香港滞在中に始まったヒマラヤの東への踏査は四半世紀が経ち、その間2014年までに37回も足を運んだ。海外での講演で、スポンサーは？とよく訊かれるが、私の場合はすべて手弁当である。

一橋大学時代に先鋭登山に熱中し、RCCII創設に参画、芳野満彦、中村幸正と滝谷グレポンを初登攀した。1958年石川島重工入社（現IHI）、1961年に会社を10ヶ月も休ませてもらい、故吉沢一郎先輩に隊長をお願いし、ペルー・ボリビア・アンデス登山隊を実現した。ペルーではコルディラブランカの数少ない6,000mの未踏峰プカヒルカ北峰に初登頂した。ボリビアでも三つの初登頂をした。吉沢さんとの出会いとアンデス遠征が、その後の人生に多大な影響を及ぼした。高度成長期前夜の良き時代だった。山岳部時代から海外志向で、欧米の山岳書籍・ジャーナルを熟読、何時か執筆者・編集者になりたいと強い願望があった。

IHIでは志願した仕事に恵まれ幸運だった。パキスタン、メキシコ、香港に駐在、パキスタンでは仕事の合間を利用してカラコラムに行き、スワートの奥まで入った。ニュー・ジーランドでは大型案件の責任者として波乱万丈の苦労を味わったが、ニュー・ジーランドのアルプスを頻繁に訪れた。南米登山の準備に1年間スペイン語の勉強をしたことが、後のペルーでのビジネスとメキシコ駐在に役立った。吉沢さんは山岳書を読むためにドイツ語を勉強した。メキシコでの6年間は中南米諸国を往来し席の温まる日はなかったが、機会をみつけてエクアドルのチンボラソなどやベネズエラの異形の台地アウヤン・テプイの

エンジェル滝を訪れた。

香港が中国辺境への出発点となった。私は群れることを好まず、組織を管理することが苦手で、プロジェクトを探し目的を達成することに生甲斐を感じるタイプである。海外の仕事でも、辺境の踏査でも同じである。チャンスを生かす強い意欲があつてのことだが、人生二毛作を可能にする行動が許されてきた会社人生に感謝している。

栄誉と海外への発信

皇太子殿下ご臨席の2004年日本山岳会晩餐会で秩父宮記念山岳賞を受賞したときは、30年近くも山登りから遠ざかっていた「キセル登山家」の忸怩たる気持ちがあつたが有難く頂戴した。大学を卒業したての頃はヒマラヤに熱を上げたが、深田久弥の言葉通りになってしまった。曰く、「ヒマラヤに行きたければ、①大会社に勤めるな②佳人を娶るな」。深田基準からすれば私は失格だった。アンデス行きが実現した後、家庭を持ち普通のサラリーマンに戻った。日本山岳会のエベレスト登山隊に松田雄一さんから打診されたが、アンデスから帰って間もなかったので辞退した。それで横道に逸れることなく、海外ビジネスに挺身でき、やがて中国辺境に通う機会が巡ってきた。

2008年、日本人で初めて伝統ある英国王立地理学協会からメダルを受賞した。夢想もしなかつた栄誉だった。ロンドンの重厚で古色蒼然たる協会に、綺羅星のごとく居並ぶ偉大な探検家とともに金色の銘版に名前が記されている。私の墓標として残ると思うと感無量である。業績を客観的に公平に評価するイギリス人の国民性のお陰である。その年にドイツ語版『チベットのアルプス』を出版した。山と溪谷社のヒマラヤの東三部作に引き続き2012年に出版した『最後の辺境—チベットのアルプス』（東京新聞社）が[第2回 梅棹忠夫山と探検文学賞]を受賞した。受賞理由の一つが地図作成である。海外ビジネスで学習したプロジェクト管理の要諦「見える形で表現する」手法が、半世紀に亘る辺境踏査・研究の集大成である『山岳地図帳』で結実した。

16年前にアメリカ山岳界の重鎮、ヒドン・ピーク、マッシュャーブルム、崑崙の最高峰、南極ビンソンの初登者であるニコラス・クリンチさんの計らいでアメリカン・アルパイン・ジャーナル編集長クリスチャン・ベックウィズさんが日本山岳会との交流のために来日した。「日本は世界から孤立している。日本との情報ネットワークは崩壊してしまった」と日本登山界のガラパゴス化を嘆いたベックウィズさんの言葉に刺激されて、日本初の海外向け英文誌を日本山岳会から出すことを当時の大塚会長、村井常務理事の後押しで実現した。この英文誌「Japanese Alpine News」と辺境探査は車の両輪となった。

2008年に王立地理学協会からメダルを受賞した折に、ケンブリッジ大学山岳会の重鎮から「半世紀は価値を失わない決定版を作って欲しい」との言葉に背中を押され本格的な準備を踏査行と並行して進めた。アメリカ山岳会の名誉会長、故ビル・パトナムさんは別の意味での恩人である。私を一番理解してくれた方で、アメリカ山岳会、国際山岳連盟UIAA

の名誉会員に推挙してくれた。しかし、パトナムさんは昨年他界され、地図帳をご覧いただけなかったのが今でも心残りである。パトナムさんはヒマラヤンクライマーではないが、カナダのブリティッシュ・コロンビアの内陸山脈の開拓者として著名である。また、アリゾナのラウエル天文台の館長を務めた。

構想の実現、さらなる展望

個々の記録は『山と漢谷』、『岳人』、日本ヒマラヤ協会の『ヒマラヤ』をはじめ内外の単行本、山岳誌に発表してきたが、広大なヒマラヤの東を概観総括する文献地図は存在していなかった。それができるのは自分しかいないという自負もあって、いずれ纏めて世に出そうと思い、地図を描き始めたのが10年前のことである。

山岳地図帳は海外向けを主と考えたため、英語をベースに日本語、中国語の三ヶ国語版を企画した。素案が固まりつつある段階で、日本山岳会創立110周年事業の記念出版になった。助成金も頂いた。内外の多くの登山家、探検家、地理学者の惜しみない協力により地図帳ができあがった。掲載した540枚の写真のうち二割強は内外から快く提供頂いた。作図編集をしていただいた竹内康之さんのご尽力、小泉弘さんのすばらしいカバー装丁のデザイン、ナカニシヤ出版さんのご協力があったはじめて世に出すことができた。その原点として横断山脈研究会というベースキャンプがある。

何が辺境へ駆り立てるのか—誰も知らない世界、未踏の山と氷河へ一番乗りすることへの衝動である。新たな地平線にフロンティアが広がる。孤独な発見の旅を重ね、何時しか世界でオンリー・ワンの存在になったが、メコン川源流域など、まだまだ多くの出かけた未踏域が残されている。

「探検家・登山家は読むこと、踏査・登山すること、記録を書くこと（伝えること）の三つそろって一人前」が吉沢さんから受けた薫陶であり、座右の銘にして実践してきた。だが、インターネットの時代になった。現代の登山家・探検家は「伝えること」ための手段としてネット配信が重要になっている。積極的に発信することによって多くの情報が集まり、より大きな成果を生み出していく。

『地図帳』が誘い水となって、2016年4月に英国の王立地理学協会香港支部から招聘され講演を行った。100名を超える方々が聴きにきてくれた。大半は英国人だった。たいへん励みになる賛辞を頂戴した。これまでに15カ国で30回の講演を行った。英語圏すでに一巡し、近年は旧東欧圏が多い。チェコのプラハ国際アルピニズム・フェスティバルには3回招待を受け常連になった。

Japanese Alpine Newsが廃刊になった。構築してきた海外のネットワークは属人的であり、私にとっては財産である。次のプロジェクトとして、アジアを起点にしたAsian Alpine E-Newsを出す。創刊号は650を超える団体・個人に5月上旬に配信した。連携を深めるために、まずは中国、台湾、韓国山岳連盟、インドのヒマラヤンクラブに働きかけている。情

報収集はアジアからのみに限定せず、広く世界から集める。欧米の山岳誌に不足している地図を多様して差別化を図る。新たな実験、チャレンジで、展開の行方が楽しみである。

内外の反響と評価

内外から多くの評価、賛辞、書評が届いている。幾つかを紹介しよう。まず、地理学・氷河地形学の泰斗、岩田修二先生の東京地学会『地学ニュース』を抜粋する。

「この本の出版は、諸外国の登山家から待ち望まれていたものである。各国の山岳会誌に掲載された「ヒマラヤの東」の未知の山岳や地域の情報に世界の登山家は驚愕した。東南チベットや横断山脈に、未踏の、氷河をまとった6,000メートル級の美しい峰々が無数に存在することが明らかになったからである。ピークは、森林に覆われた3,000メートル前後の谷間からそびえている。中村はここをチベットのアルプスと呼んだ。そして、それらピークの初登頂競争が欧米の登山家を中心にはじまった。

中村の踏査は海外の山岳界や探検界で高く評価され、2008年に中村はイギリスの王立地理学会のバスクメダルを受賞した。このメダルは、カール・ブツァーや、L.B. レオポルド、ジャン・トリカルなど著名な地理学者が受賞している学術賞である。ほぼ同時に“**Die Alpen Tibets**”という、美しいカラー写真満載の豪華本がドイツで刊行された。刊行直後から英語版を早く出せという要望がイギリスやアメリカから多数寄せられたそう。それに応えたのが今回の『ヒマラヤの東山岳地図帳』である。」

海外からは70通ほどのメールが届いた。キルギス山岳会会長のメッセージが印象深い。

「ご労作ヒマラヤの東山岳地図帳を喜んで拝受しました。深謝します。ヒマラヤの本と言えば、殆どが8,000m峰を対象にしていますが、貴殿の本はヒマラヤに東の壮麗で広大な別の山岳の世界に目を開かせます。クラブ会員のために、図書館に収め公開します。さらにウェブ・サイトで紹介し多くの登山家に情報提供をします。

この創造的な書籍は恰好な手本です。既にキルギスの山のガイドブックの初版をインターネットで配信していますが、更に多くの材料を集めて、貴殿の本のアイデアを借用して新しいスタイルで配信しようと思います。」役立ててくれれば嬉しい。

友人の英国オクスフォード大学の地球科学教授のマイク・サールさんから賛辞とともに『衝突する大陸』が送られてきた。ヒマラヤ・チベット山塊の形成をインド・ユーラシアの衝突からはじまり、最近のスマトラ地震までを、西はザグロス山脈から、東はベトナム・雲南まで漏れなく、地質構造を説明し、自身の調査旅行・山行と結びつけて分かり易く解説した画期的な大書である、と岩田先生は評価している。

英国アルパインクラブ、ニュージーランド山岳界は『地図帳』をニュースレターに載せ、中国のサイトはインターネットで詳しく紹介してくれている。日本山岳会110周年記念出版と謳ったとも海外の注意を惹いた。ニュージーランド山岳界と南アフリカ山岳会は祝電を

くれるとともに今年2016年は自分たちのクラブが創立125年迎えることを伝えてきた。南アフリカ山岳は熱心でケープタウン登山クラブとケープタウン大学図書館に一冊ずつ購入してくれた。

「バンフ・マウンティン・フィルム&ブック・フェスティバル2016」と「ヒマラヤンクラブ・ナオロジー・ブックアワード2016」にエントリーした。ヒマラヤンクラブはジャーナルで紹介してくれている。著者冥利に尽きる。海外登山界とのさらなるネットワークの広がり思いを馳せている。そして、辺境への憧憬は終わることはないだろう。